

巻頭言

深刻さを増す共生社会実現の困難

—世界終末時計からの示唆—

共生社会文化研究所長 福島 哲夫

この1年だけを見ても、国内外で共生社会の実現に逆行する動きが高まっていると言わざるを得ません。国内においてはいくつかの政党がそのように受け取れる方向性を示し、一定の支持を得ており、国際情勢は2026年の年明けとともに、よりはっきりとその傾向が現れています。

このような状況で、例の世界終末時計 (Doomsday Clock) は、2026年1月27日には人類の滅亡の1分25秒前を示すに至りました。これは前年より4秒進んだこととなります。ちなみにこの世界終末時計とは1947年に科学者団体の「原子力科学者会報 (Bulletin of the Atomic Scientists)」によって導入された象徴的な指標です。

この世界終末時計は、人類の滅亡を「午前零時」に見立て、そこまでの残り時間を示すことで、地球規模の危機を警告しています。冷戦期には主に核戦争の脅威が基準となっていました。近年では気候変動、パンデミック、さらにはAI (人工知能) や偽情報によるテクノロジーの脅威など、人類の生存を脅かす要因は複雑化・複合化しているとされています。

これはまさに「実存的脅威の蔓延」と言えます。そしてこのような生存そのものが脅かされていると感じる環境下において、人々が他者に対して寛容であり続けることは極めて困難です。世界終末時計の針が進むこと (= 危機の深化) は、私たちの心に余裕を失わせ、社会全体に不信感と分断の種を蒔いているのです。

このように共生社会実現の困難さとこの「実存的脅威の蔓延」とは、悪循環的にお互いに強め合っていると思われます。つまり、共生社会の実現を阻む差別や偏見は、単なる個人の道徳的な欠如ではなく、実存的脅威に対する人間の「心理的な防衛反応」としての側面を強く持っているのです。

さらに視点をミクロに移し、私の専門である臨床心理学から個人の内的世界を考えると、人間が耐え難い不安や葛藤に直面した際、それを自分自身のもので抱えきれず、他者に押し付けてしまう「投影 (Projection)」や、さらにそれに対して一人相撲的に反応して結果的に相手を巻き込んでいってしまう「投影同一化 (Projective Identification)」という防衛機制が注目されます。現代社会に渦巻く漠然とした不安、経済的な困窮への恐れ、あるいは自己無価値感といったネガティブな感情は、個人にとって直視するにはあまりにも苦痛です。そのため、人々は自らの内にある「悪い部分」や「弱い部分」を無意識のうちに切り離し、社会的に立場の弱いスケープゴート (少数派、生活困窮者、外国人労働者など) に投影し、「社会が悪いのは彼らのせいだ」「彼らが私たちの利益を奪っている」と他者を攻撃することで、一時的に自分自身の心の安定を保とうとするのです。これは病

理的なメカニズムではありますが、過酷な環境下では誰もが陥りうる心の働きです。

英国の精神分析医 D.W. ウィニコットは、乳幼児が健全に育つためには、養育者による「抱える環境 (Holding Environment)」が不可欠であると説きました。これは物理的な抱擁だけでなく、子どもの不安や衝動を安全な形で受け止め、消化して返すという心理的な器の役割を指します。翻って現代社会を考えると、地域コミュニティの希薄化、個食化に象徴されるような家族形態の変化、過度に競争主義的な経済システムの中で、大人たちにとってもこの「抱える環境」が決定的に不足しています。

不安を受け止めてくれる安全な器 (コンテナ) を持たない個人は、他者の痛みに対する共感能力を維持することができません。「共感疲労 (Compassion Fatigue)」という言葉が示すように、自らの生存や心の平穏を守ることで手一杯な人々に対して、「他者を理解し、共生せよ」と倫理的な当為を説くだけでは、かえって無力感や反発を生む結果となります。共生社会実現の困難が深化している背景には、人々の心を受容し安定させる社会的・心理的なセーフティネットの機能不全が存在していると思われまます。

また、スイスの心理学者である C.G. ユングは、人間の心には自我が受け入れがたい側面が「影 (Shadow)」として無意識に抑圧されるとしました。影は個人の中で統合されない場合、しばしば外部の対象へ投影される傾向があるとされます。この観点から見ると、社会的対立や敵意の一部は、集団レベルにおける「影の投影」として理解することも可能です。自分たちの内部にある不安や攻撃性、弱さを認めることが難しい場合、それらは外部の集団へと投影され、「敵」や「脅威」として知覚される可能性があります。このような心理的メカニズムは、民族対立や政治的分極化を理解する上でも示唆的です。

心理療法の文脈では、人格の成熟とは、自分の影を認識し、それを統合していく過程と考えられています。同様に、社会における共生もまた、他者を単純な敵として排除するのではなく、対立の背後にある心理的・社会的要因を理解しながら関係を再構築していく過程として理解できるかもしれません。この意味で、共生社会の構築は単なる制度設計や政策の問題ではなく、人間の心理的成熟とも関係していると考えられます。

世界終末時計が示すマクロな危機と、それが引き起こす社会的な分断、そして個人の不安と投影の連鎖。これらを総合すると、共生社会の実現とは「人間が本能的に抱く恐怖や防衛機制との絶え間ない闘い」であることが分かります。多様な他者と共に生きることは、決して自然で楽な状態ではなく、高度な心理的成熟と社会的支援を必要とする課題なのです。

このような課題の中で、本研究所は 2019 年に設立されて以来、細々とではありますが活動を続け、2026 年 (令和 8 年) 度は研究員 (本学部併任教員) 15 名、特別研究員 (外部や若手の研究員) 23 名と、年々その所帯を大きくしていきつつあります。これは、様々な関係者のこの研究所の活動に対するご理解と肯定的評価の表れであるとともに、上述のような内外の大きな課題への危機感の表れであり、研究所への期待の大きさを示すものでもあると感じています。

まだ、10 歳に満たない研究所ではありますが、本紀要もまだまだ論文数が少ないものではありますが、より一層の研究・研修・啓発活動を続けて行きたいと思っています。